

あとがき

本書は、すでに出版された『一次産品問題の新展開——情報化と需要変化への対応』（アジア経済研究所、一九八九年）の姉妹編であり、本来ならば、本書が先に出るべきものであったが、諸般の事情で遅れてしまった。本書の母体は、アジア経済研究所の研究會「開發過程における一次産品問題」（主査平島成望、一九八七年度）と「發展途上国と一次産品問題」（主査朽木昭文、一九八八年度）の成果を母体にし、これにいくつかの商品にかんする分析を加えてできたものである。

一次産品は多種多様で、生産、流通、取引形態も千差万別であり、一人で商品論を書くことは容易ではない。本書では、一次産品の特性を考慮して、実務の方々にそれぞれの専門商品について執筆をお願いした。多忙ななかにあつて、貴重な時間をさいて執筆して下さった方々に心からお礼を申し上げたい。ただし、各章はあくまでも専門家の一人としての分析であり、所属機関の見解を代表するものではないことをお断りしておきたい。

また、紙面の制約から、いくつかの商品については大幅に縮小せざるをえなかったために、執筆者の意図を十分に反映させることができなかった。お許し願いたい。しかし、国際商品としての一次産品について客観的知識を提供するというわれわれの目的は果たすことができたと思う。これを機会に、構造的関連性を強め、日一日と変化する世界経済の動きを、身近な商品の目を通して眺める有効性を知って欲しいと願う次第である。

本書がまがりなりにも一冊の本としてまとまったものとなったのは担当者の富沢田子さんの並々ならぬ尽力のお陰である。記して感謝する。

一九九〇年二月

編者

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後、古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここに存在する。これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の事に力を尽くしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考える場合、在来流行の理解によるパターンを以てするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があつて、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考えられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。——この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かって、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七カ年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月

アジア経済研究所 東 畑 精 一

アジアを見る眼

開発経済学文献と解題

渡辺 利夫・ 開発途上国における開発課題のあり方と変遷について概論的な展開を試み、後段の文献解題では、堀 侑編 できるだけ新しい文献を取り上げた。

公座 第三世界の食糧問題

長谷山崇彦・ 21世紀に向けてますます深刻さを加えている途上国の食糧問題の実態を分析し、水産資源の開発問題、農業技術問題も併せて解説、将来を展望する。小島 麗逸編

地域経済の国際化

山崎 充・ 中小企業がかかえる海外投資の問題を扱い、地域産業の特徴、国際化の現状と見通し、さらに地域特性のある業種から選んだ海外投資事例で構成。小池 洋一編

中東の開発と統合

宮治 一雄編 70年代の経済開発政策の現在への影響を政治統合と社会統合の視点から具体的な事例により検討し、その将来を展望する。

アビジャン日誌

原口 武彦著 西アフリカの近代的都市アビジャン滞在中に見聞した庶民の生活ぶりを、ユーモアあふれるタツチでつづるアフリカ報告。

メキシコ教育发展

米村 明夫著 メキシコ教育发展の社会学・経済学的分析を通じて、途上国の社会経済発展における教育の役割への多面的接近を試みる。近代化への挑戦と苦悩

「はかり」と「くらし」

小島 麗逸・ 途上国のくらしに根ざした度量衡の実態を、30数名の地域研究者が体験的に論じ、解明。第三世界の地域理解に必須の手引。第三世界の度量衡 大岩川 嫩編

発展途上国の企業経営

米川 伸一・ 欧米の経営ノウハウ枠組が土着の経営風土に移転、担い手と戦略の変遷 小池 賢治編 転型されてどう消長したか、マルコス期のクロニクル、香港のJ.M.商会等、各国事例を具体的に検討。

アジアを見る眼

「こよみ」と「くらし」

第三世界の労働リズム

小島 麗彦・途上三十数カ国の多様な生活リズムを、地域研究者の眼で「雇」の世界に探る。巧まざる文明批評。

第三世界の教育

豊田 俊雄著 途上国教育を、文化的・宗教的伝統を背景に、六地域に分けて考察。第三世界の教育に、原点をみる。

ラテンアメリカ経済の危機

新しいパラダイムへの模索

ECCLAC編 小坂・細野・沢出 対外累積債務等の経済危機に瀕する中南米で、国連の地域事務局が総力をあけてその長期戦略を案出。

第三世界の農業政策

保護と財政

小倉武一監修 財政赤字、ひいては累積債務問題と農業・食糧政策とが切り離しえない深い関わりをもっているこの一端を、各国の実態報告で明らかにする。

アセアンの経済計画

歴史的課題と展望

井草 邦雄編 国づくりのシナリオともいうべき経済計画を歴史的にたどり、近代的経済構造へ転換しつつある現在と将来の発展を考察する。

「すまい」と「くらし」

第三世界の住居問題

堀井 健三編 「国際居住年」から二年を経て、第三世界の住居問題はますます深刻。都市のスラムに、農村の集落に、その多様な実態を浮き彫りにする三十数編。

中東 国境を越える経済

宮治 一雄編

中東主要国・地域の最近の動向の中からレバノン内戦、イスラム金融、出稼ぎ問題等、八つの代表的問題を選び、中東安定化の基本的な方向を探る。

「のりもの」と「くらし」

第三世界の交通機関

吉田 昌夫編 ベンチャーから飛行機まで、途上国の人々の暮らしの足として、経済活動の動脈として活躍する多様な交通機関のあり方を興趣豊かに解説する三五編。大岩川 敏